

オールドス地方，唐代の塩州五原県青白塩池といわれたところ，甘肅省武威，張掖，寧夏回族自治区の数ヶ所の塩池，青海省の茶卡湖，新疆省の鄯善県，塔城區等が報告されている。

大塩は山西省解州の塩池で採れるいわゆる河東塩で，塩池は解県と安邑県の間にあり，そこでは畦を作り鹹水を入れておくと，天日の強烈な風によって水分が蒸発し，塩が結晶する．それを顆塩，一名大塩という。

『本草衍義』注には歯肉から出血するものは塩湯で口を漱げ，とある。

中国では古来塩は歯口疾患の予防と治療に用いられているが，予防のためには塩水または塩を含

む薬方による含嗽，揩歯を行う．歯牙及び口腔軟組織疾患の治療には塩を含む薬方により，内服，口に含む，歯をこする，患部に塗る，含嗽する，すり込む等の方法が用いられている。

これらの薬方を用いる疾患を現代の病名でいえば，舌炎，歯槽膿漏，歯肉炎，齦歯，歯周炎，下顎骨潰瘍である。

前記の4種の塩のうち，最も良質のものとして尊ばれたのは青塩で，塩分の純度が非常に高い．光明塩，大詩はこれに次ぐ．しかし中国古代にこれら各種の塩が，口歯の諸疾患に対して使い分けられた理由はわからない．（東京都世田谷区）

19世紀前・中葉におけるリゾドントリピーの 書誌学的研究

森 山 徳 長

口腔外科の先駆者 S.P. Hullihen は，米国で世界最初に創刊された歯科医学専門雑誌 American Journal of Dental Science の第1巻4号（1840年5月発行）に，『歯痛一歯の疼痛の観察』と題して，歯痛の原因別の症状と療法を詳説した．その療法のうち，歯髓腔に膿汁が貯留するための歯痛の処置は，初期には膿汁が形成され次第，穿孔して排泄してしまうことと，すでに額に腫張が及び搏動性の痛みがある場合は抜歯が唯一の方法であるとした．また露髓を処置して充填した後，時間が経過して化膿の傾向が現れた場合は，充填を除去し髓腔に穿孔すると記載している。

彼は10年後に，歯科医療の普及に伴って頻発する充填後の歯齦膿瘍の予防処置として，ドリルで異常を訴える充填歯歯頸部に，歯齦と歯槽骨縁を穿通したのち，歯牙実質に対して，髓腔に達する

穿孔を行って，症状の緩解を計る方法を推奨した。

これは Risodontropy, Rhizodontrophy など，または Hullihen's Operation と呼ばれ，一時期米国で流行，英国にも追試者が現れて，1980年代までこれに関して活潑な論議が行われた。

歯髓の焼灼か抜歯以外には，効果的な歯痛の療法がなかった時代から，制腐的外科学の原則にもとづく歯内療法が一般化する，80年代にいたる中間の時代にあって，しかもアマルガム戦争に象徴される歯科治療の普及にともなう，臨床歯科医の悩みの側面を浮彫りにするところの歴史的道程であったと思われる。

当時の文献をたどってその賛否の論議を分析し，歯内療法発達史黎明期の一角を明らかにしたいと思う．（東京歯科大学）